

伝統的な温泉地における共同湯の役割

The roles of community bathhouses in Japanese traditional hot spring villages

46142 戸田 惣一郎

The purpose of this study is to analyze roles which arise from space value and utility value and are over a role as facilities only to take a bath of community bathhouses in 32 Japanese traditional hot spring villages.

The results are follows: 1) The roles which arise from space value are The landmark of the hot spring village and The symbols of some areas in the hot spring village. 2) The roles which arise from utility value are The space in which inhabitants gather and communicate each other and The bathhouse which lodgers of ryokans in the hot spring can use like a bath of the ryokan.

1. 研究の背景と目的

かつて伝統的な温泉地の中心部には共同湯があり、入浴客で賑わっていたが、明治期以降浴場をもつ旅館が当たり前になっていくと、共同湯は、一部の温泉地を除いて閉鎖されたり、住民の為の浴場になった⁴⁾。そして、家庭の風呂も当たり前になった現代において、共同湯利用者の減少は単に入浴するための施設としての役割低下を示しており、共同湯は統廃合される傾向にある。だが、一方で近年の個人志向の温泉ブームを背景に、一部の温泉地では共同湯を個性として観光などに活用する動きがあり、共同湯の新たな役割を示している。本研究で着目するのは、入浴機能を超えて生まれる共同湯の役割である。

本研究と同じように、共同湯をあつかった研究には、事例をとりあげ利用実態を明らかにしたもの¹⁾、空間構造や地理学の視点から温泉地の歴史的な変遷を明らかにする際に一部とりあげたもの^{2) 3) 4)}がある。しかし、現代の温泉地における共同湯の役割を俯瞰的にとらえたものはない。

そこで本研究は伝統的な温泉地における共同湯の現代的役割を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法と対象事例

2-1 共同湯の定義

公衆浴場法における一般公衆浴場の定義¹⁾を参考に、本研究では、共同湯を「温泉を使用した浴場で、主に地域住民の日常生活において保健衛生上必要なものとして共同で利用される施設」と定義する。また、外湯は、旅館内の浴場「内湯」に対する共同湯の呼び名で、共同湯と同義である。

2-2 研究の方法

本研究では、温泉地における共同湯の歴史と現状(第3章)を整理し、その役割を存在価値がもたらすもの(第4章)と、使用価値がもたらすもの(第5章)に分けて抽出し、分析する。第3章は主に資料調査によるものであり、第4章、第5章は加えて現地調査、ヒアリングを適宜行っている。

2-3 研究対象とする温泉地と共同湯

環境省の「温泉利用状況」によると、温泉地は平成14年時点で全国に3102ヶ所ある。このうち、次の3つ条件を定め、文献調査などから研究対象とする伝統的な温泉地32箇所、共同湯123件を抽出した(図1)。

温泉番号	地名	温泉村
1	山形	花山 湯野町
2	山形	花山 湯野町
3	山形	花山 湯野町
4	山形	花山 湯野町
5	山形	花山 湯野町
6	山形	花山 湯野町
7	山形	花山 湯野町
8	山形	花山 湯野町
9	山形	花山 湯野町
10	山形	花山 湯野町
11	山形	花山 湯野町
12	山形	花山 湯野町
13	山形	花山 湯野町
14	山形	花山 湯野町
15	山形	花山 湯野町
16	山形	花山 湯野町
17	山形	花山 湯野町
18	山形	花山 湯野町
19	山形	花山 湯野町
20	山形	花山 湯野町
21	山形	花山 湯野町
22	山形	花山 湯野町
23	山形	花山 湯野町
24	山形	花山 湯野町
25	山形	花山 湯野町
26	山形	花山 湯野町
27	山形	花山 湯野町
28	山形	花山 湯野町
29	山形	花山 湯野町
30	山形	花山 湯野町
31	山形	花山 湯野町
32	山形	花山 湯野町

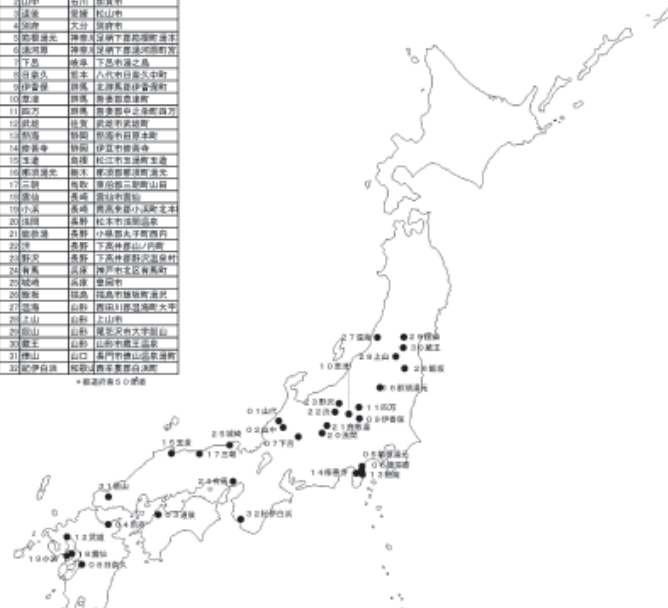


図1 研究対象とする伝統的な温泉地32箇所

①現時点で10軒以上の宿泊施設があること(32ヶ所)⁽²⁾→②明治初期の時点で温泉地としての集積があること(60ヶ所)⁽³⁾→③明治初期の時点における共同湯の利用形態がわかること⁽³⁾(32ヶ所)

3. 温泉地における共同湯の現状

3-1 温泉地における共同湯利用の変遷

温泉旅行の主流なスタイルの移り変わりに着目すると、温泉地と共同湯の関係は大きく4つの時代区分に分けて整理することができる。

①外湯型湯治・保養中心期

近世後期から明治初期は、温泉旅行といえば自炊しながら共同湯につかる外湯型の湯治や保養が主流の時期である。研究対象地の半数となる16の温泉地では、宿泊客は内湯のない小さな旅館に泊まり、共同湯に入浴した。温泉街の中心には有力な共同湯(中心型)や複数の共同湯群(散在型)が核を形成し²⁾、宿泊客も住民問わず入浴客で賑わっていた。そのため、共同湯を取り囲むように旅館や商店が集まり温泉街を形成していった。

②内湯型観光移行期

明治中期から昭和初期は、外湯型の湯治・保養から内湯型の観光へと旅行スタイルが移っていく時期である。新源泉の開発の結果、研究対象である32の温泉地のうち13箇所新たに内湯化が進み、内湯持ち旅館のない温泉地は、かねてから温泉湧出量のあまり豊富でない城崎温泉、俵山温泉、道後温泉の3箇所のみになった。内湯化が進めば共同湯を利用する宿泊客は減る。したがって共同湯は徐々に住民用の浴場へと移っていった。

③慰安観光全盛期

昭和中期から昭和後期は、マスツーリズムを背景に慰安旅行や周遊観光が頻繁に行われた時期である。その対象となった温泉地では、旅館が大規

模化し、宿泊客を囲い込んだため、共同浴場を利用する宿泊客はますます減少した。一方、草津温泉や飯坂温泉などでみられるように、地域住民のために共同湯を新設する動きもあった。だが、自家用の風呂が普及するようになると共同湯の利用客は徐々に減りだした。

④個人旅行移行期

平成以降は、マスツーリズムから個人志向の温泉旅行へ移行した時期である。個性のある温泉地が躍進し、個性のない温泉地が旅館の利用率低下に悩む。その中温泉地の個性として観光に活用される共同湯が一部みられるが、多くの温泉地において住民用の浴場となった共同湯は利用客減少という課題を抱える。共同湯同士の関係や分布の状況には特徴があり、「中心外湯維持型」「散在外湯維持型」「散在外湯喪失型」を確認できた(表1)。

3-2 温泉地の現状と主な課題

(1) 限られた温泉の保護

温泉地の拡大と共に動力源泉に頼って増加してきた温泉湧出量は、ここ数年頭打ちの傾向がある(図2)。また、平成5年度に許可を得て採掘された新源泉の湧出量を追った環境省の調査⁶⁾によれば、一割弱の源泉に湧出量減少などの変化が生じている。源泉を開発しても湧出量が限られている以上、温泉地を持続していく為には、今ある温泉資源の保護を進める必要がある。

(2) 温泉地らしい温泉地づくり

近年、観光客が温泉地を選ぶときやその満足度を評価するときには、交通の利便性や利用した宿などの印象だけでなく、「温泉地の雰囲気」や「露天風呂、外湯など温泉場の魅力」といった温泉地そのものに対する印象の影響が大きい⁷⁾。したがって、温泉地ならではの雰囲気、知覚・体感イメージの向上が、温泉地活性化を実現する上で重要な課題となる。

表1 共同湯の分布状況による分類

外湯分布による分類	中心外湯維持型	散在外湯維持型	散在外湯喪失型
概念図			
明治期の外湯分布	中心型	散在型	散在型
共同湯同士の関係	中心外湯>その他	パラレル	-
特徴	温泉街の中心に位置する有力な共同湯を維持	温泉街の各地区に散在する共同湯を維持	散在する共同湯を喪失
事例	草津、山中、山代、飯坂、道後、有馬、日奈久、武雄	俵山、雲仙、四万、城崎、上山、蔵王、紀伊白浜、野沢、银山、洪	那須湯元、修善寺、小浜

(3) 温泉地生活者の高齢化対策

温泉地には市町村区人口の一割が住む。2000年時点の温泉地生活者⁽⁴⁾の高齢率は24%と、市町村区の19%より5%も高い。すでに32ヶ所の温泉地のうち20ヶ所は、高齢率25%以上で超高齢社会である。そのため、高齢者対策が課題である。

4. 共同湯の存在価値をもたらす役割

4-1 共同湯の有する空間的象徴性

かつて温泉地において共同湯は、温泉街の中心核を形成するとともに、目立ちやすく要所に位置して温泉地の空間イメージを高めていた²⁾。これは、共同湯の存在自体が空間的にもっていた役割といえる。現在でも温泉街の要所に位置する象徴的な共同湯は多い。ここでは、現代の温泉地において共同湯が空間的に有する象徴性、すなわち温泉地における①共同湯の立地環境、②共同湯の建築意匠の象徴性を分析し、温泉地シンボル(4-2)、地区シンボル(4-3)としての役割を抽出した。

①共同湯の立地環境

共同湯の85%は、温泉街に立地している。隣接

する街路との関係をみると、温泉街の繁華街路に隣接するものが67%、その他骨格街路に隣接するものが31%ある。かつて共同湯が温泉街の中核を形成していたことをふまえると、この31%は建てかえや新設の際に繁華街路から外れたものと考えられる。上山温泉を例にあげれば、現存する6つの共同湯のうち5つはかつて繁華街路上にあったが、そのうち4つは建てかえの際に住宅の多い裏手へと移設され、目立たなくなった。また、街路との接し方をみると、ごく一般的なのは直線部型だが、分岐点型、曲部型、ロータリー型など目立ち安いものも多い。

②共同湯の建築意匠

共同湯の建築には、「歴史的浴場建築」や歴史的浴場建築のデザイン要素を継承する「現代的浴場建築⁽⁶⁾」など、建築的に観光資源となりえるものが全体の16%件ある(図5)。その多くは、温泉地の共同浴場のなかでも大湯、総湯といった中心的な共同湯である。また、比較的新しい「現代的建築」が38件ある一方、大半をしめる「その他」

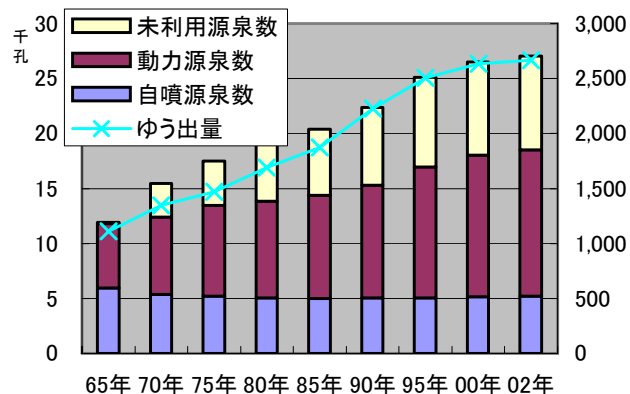


図2 温泉の動向

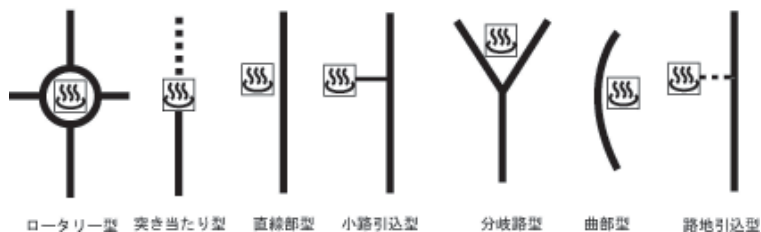


図3 共同湯と街路の接し方類型

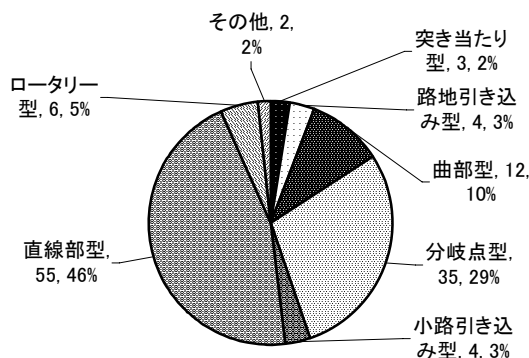


図4 共同湯と街路の接し方

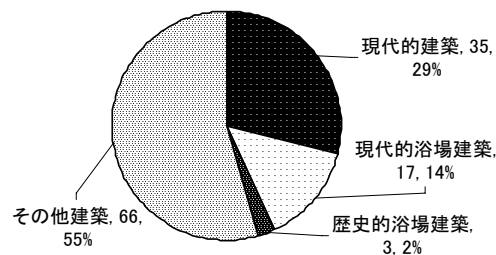


図5 共同湯の建築意匠

表2 共同湯の建築意匠の類型

建築タイプ				
	歴史的浴場建築	現代的浴場建築	現代的建築	その他

の建築は主に昭和後期に地域の住民向けにつくられた特徴のないもので、老朽化も進んでいる。

4-2 温泉地シンボル

(1) 温泉地シンボルとは

温泉街の中心に位置し、温泉地のシンボルとなるような中心的共同湯である（表3、図6）。伝統的な浴場建築やそのデザインを継承する現代的な浴場建築が、繁華街路を阻むように立地し、ロータリー型の街路の中心になったり、分岐路に位置して広場的な空間を形成している。山中温泉や草津温泉などのように実際に広場を形成するものもある。

表3 象徴的な共同湯の抽出基準

	温泉地シンボル	地区シンボル
温泉街類型	中心共同湯維持	散在共同湯系
共同湯	中心的共同湯	共同湯
立地	温泉街	温泉街
隣接街路	繁華街路	繁華街路
接し方	ロータリー 分岐路	分岐路 小路引き込み 曲部 直線部
建築タイプ	伝統的浴場建築 現代的浴場建築	伝統的浴場建築 現代的浴場建築
事例	菊の湯(山中)、道後温泉本館、武雄温泉、鯖湖湯(飯坂)、白旗の湯(草津)	綿の湯、信玄の湯(渋)、上寺湯、大湯、河原湯(野沢)、一の湯、まんだら湯、御所の湯(城崎)、竹瓦温泉(別府)など

(2) 温泉地シンボルの効果

温泉地でも観光客が訪れる頻度の高いスポットであり、ガイドブックなどでは温泉地を代表して紹介されることが多い。観光客を旅館の外へ引き出す効果や、山中温泉といえば菊の湯といったように温泉地のイメージアビリティを高める効果があると考えられる。

4-3 地区シンボル

(1) 地区シンボルとは

要所に散在する温泉街各地区のシンボルとなるような共同湯である（図7）。個々の共同湯は温泉地シンボルほど象徴的ではないが、他の共同湯と



図6 温泉地シンボルの例（山中、道後）

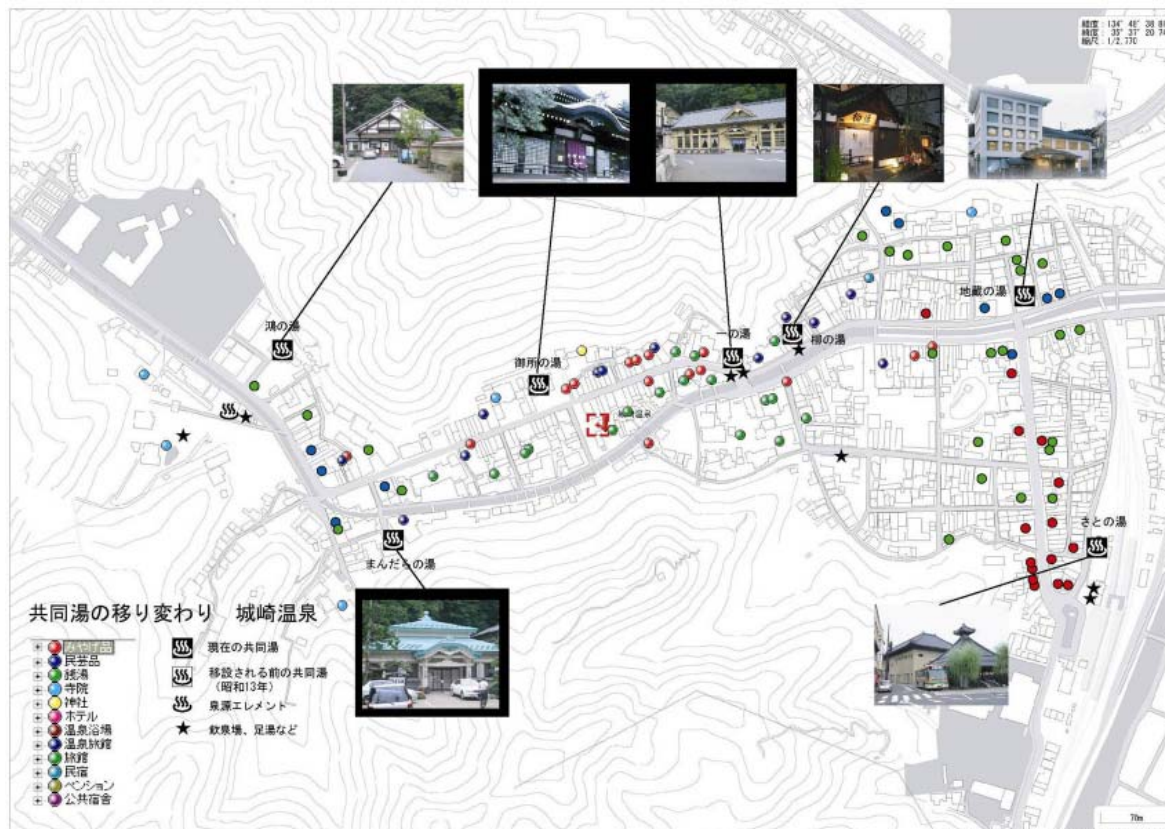


図7 地区シンボルの例(城崎)

街路を介してネットワークを形成する。

(2) 地区シンボルの効果

温泉街の各要所に散らばった温泉地ならではの浴場建築が、繁華街路に温泉地らしさを演出する。観光客は、散策中に唐破風、湯気出し櫓などをもつ独特の浴場建築を目の当たりにして、温泉地らしさを感じとると考えられる。

4-4 存在価値を再生する

温泉地シンボル、地区シンボルとして抽出された事例は、123件中20件とあまり多くない。だが、立地、街路との関係において象徴性を有する共同湯は72件ある。それらの多くは、建築意匠において温泉地らしさを見出しにくくなっている。特に「その他建築」の共同湯は、主に昭和後期に住民の浴場としてつくられた特徴のないもので、老朽化も進んでいる。また、比較的新しい「現代的建築」でも、タイル張りの箱物では浴場であるかどうか中に入るまでわからないものもある。

一方、鯖湖湯は飯坂温泉の中心的共同湯で、平成5年先代のデザインを継承する形で福島市などにより建てかえられた(図8)。先代は、明治22年に地元の宮大工につくられたといわれる浴場建築である(図9)。老朽化に伴い先代の鯖湖湯を建てかえる際、隣接する透達湯と統合し、より敷地の広い透達湯跡地に鯖湖湯を移設、鯖湖湯の跡地を鯖湖神社と一体になったポケットパークに整備した。共同湯の存在価値、象徴性や温泉地らしさなどを維持再生する形で更新された事例といえる。



図8 「鯖湖湯再現基本設計」(福島市)



図9 先代の鯖湖湯

5. 共同湯の使用価値をもたらす役割

5-1 共同湯の使われ方

共同湯の代表的な使われ方は入浴である。現在でも温泉地には、地元の人々の利用に供されている共同湯は多く、一方、観光に活用される共同湯は一部である^{2) 4)}。ここでは、①温泉街における共同湯の立地、②日常・観光利用の起こりやすさを評価して、日常・観光利用が活発におこなわれていると考えられる代表事例を選出して利用実態の現地調査をおこない、地域コミュニケーションの場(5-1)と温泉街の内湯(5-2)としての役割を抽出した。

5-1 地域コミュニケーションの場

(1) 地域コミュニケーションの場とは

地元住民が集まりコミュニケーションをする場になる、地域に根付いた共同湯である。上山温泉の二日町共同浴場には、夕方に地域の高齢者があつまる。浴室からは、方言交じりの会話がたえない。湯につかるでもなく、浴槽端で会話をしながら時おり湯かけしている。湯上り後はロビーに集まり管理人を交えてしばしの談笑。毎日のように夕方共同湯に来て温泉につかり、談笑することが習慣化した「常連」もいる。飯坂温泉には、共同湯ごとの常連仲間がある。特定の時間帯に特定の共同湯にいくと、特定の常連仲間がいて、浴槽のまわりでかけ湯をしながら談笑するのである。

表4 共同湯の日常・観光利用のおこりやすさ

	日常利用	観光利用
立地	住宅地	温泉街
隣接街路	-	繁華街路
共同湯の集積	-	有
料金	安価	-
利用システム	-	宿泊客むけ有
観光資源性	-	有
事例	飯坂、上山、草津、野沢、渋、日奈久、四万、三朝、紀伊白浜、雲仙など	城崎、俵山、渋、野沢



図10 地域コミュニケーションの場の例(上山)

(2) 地域コミュニケーションの場の効果

地域住民の交流を創出している。注目すべきは、特に高齢者同士の貴重な交流を生んでいることである。

5-2 温泉街の内湯

(1) 温泉街の内湯とは

温泉街において、旅館の内湯の延長としても機能する共同湯である。旅館街から「近いと感じる時間距離」⁽⁷⁾に共同湯が散在し、それらを旅館の内湯として機能させるシステムもある。城崎温泉(図11)では、駅舎温泉さとの湯と鴻の湯を除く5つの共同湯が、旅館などの集積する繁華街路上700mの範囲に散在する。宿泊料金にあらかじめ共同湯の利用料金を含めて宿泊中何回でも共同湯に入浴できるシステムがある。俵山温泉では、温泉の湧出量が非常に少ないため、ほとんどの旅館に浴場がない。宿泊客も共同浴場で入浴するいわば伝統的な湯治スタイルを貫いている。

(2) 旅館の内湯の効果

旅館の内湯として機能する共同湯が充実すれば、事実上旅館の内湯のバリエーションが充実することになり、旅館は自己の浴場を拡充する必要性が減少する。旅館の費用負担、温泉使用量の両方を削減できるだろう。また、観光客の回遊行動を生むと考えられる。

6. 結論

温泉地における共同湯の単なる入浴機能をこえた役割として、存在価値によるものと使用価値によるものを2点ずつ確認できた。

①存在価値による共同湯の役割

- ・温泉地シンボル
- ・地区シンボル

②使用価値による共同湯の役割

- ・地域コミュニケーションの場
- ・温泉街の内湯

共同湯は、現在の温泉地の抱えるいくつかの問題(3-2)に対して解決の糸口となる。温泉街の内湯として活用できれば、限られた温泉資源を温泉街で分け合える。温泉街のシンボルとして活用できれば、温泉地らしいイメージを演出できる。地域コミュニケーションの場として活動できれば、高齢者の引きこもり防止に役立つ。共同湯の単なる入浴施設としての役割が薄れている現代においても、その存在価値や使用価値を再び高めるような役割を付加されるならば、共同湯は温泉地再生に貢献できるだろう。



図11 城崎温泉の湯めぐりの様子

【謝辞】

ヒアリング調査にご協力いただいた皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

【補注】

- (1) 公衆浴場法における「一般公衆浴場」とは、温湯等を使用し、同時に多数人を入浴させる公衆浴場であって、その利用の目的及び形態が地域住民の日常生活において保健衛生上必要なものとして利用される入浴施設をいう。
- (2) 観光地としての温泉地における共同湯活用の知見を得るため、ある程度温泉街集積のある温泉地を選んだ。
- (3) 存在価値による役割は、温泉地と共同湯の歴史的な関係に影響される。そこで、温泉地と共同湯の係りに歴史的な蓄積があり、空間的特徴を把握できる温泉地を選んだ。
- (4) 平成12年度国勢調査の結果を基に、温泉地の中心から直径2km圏の行政区に住む人を温泉地生活者とした。
- (5) 現代的浴場建築とは、伝統的な浴場建築のデザイン要素を継承した和風の建築を指す。伝統的な浴場建築のデザインとは、唐破風、入母屋屋根、湯気抜き櫓などである。
- (6) 樋口忠彦は、「土木工学体系13景観論」(土木学会編、彰国社、1977)の中で、現代人が近いと感じる時間距離は6分程度といわれている事を挙げ、6分以下の歩行では障害感が生まれにくいことを指摘している。ここでは、温泉街における実験にもとづき、近いと感じる時間距離を300mとした。

【主要参考文献・資料】

- 1) ヒューマンルネッサンス研究所／八岩まどか著：温泉と共同湯 ふれあいと癒しのコミュニティ，青弓社，1997
- 2) 下村彰男：わが国における温泉地の空間構成に関する研究（Ⅰ）—近世後期から明治期にかけての温泉地の空間構成—，東大農学部演習林報告 90，pp23-95
- 3) 下村彰男：わが国における温泉地の空間構成に関する研究（Ⅱ）—近代における温泉地空間の変遷—，東大農学部演習林報告 91，pp23-114
- 4) 山村順次著：日本の温泉地 その発達・現状のあり方，日本温泉協会，1998
- 5) 松山慎二編：日本温泉大鑑，博文館，1941
- 6) 環境省：温泉の保護と利用に関する都道府県アンケート調査，2003
- 7) 国土交通省総合政策局観光部：温泉地への期待と満足をとらえた遊客戦略づくり，2003